浄瑠璃評判記解説（三）

横山　正

波のうねり鼎噂

〔装幀〕縦五寸、横三寸五分（曲尺）。但、筆者が見たものは豊竹山城少掾師所蔵のもので、蒐印帳に一枚づつ貼つてある。これも戦災で焼失したことと思ふ。改装、改表紙。

〔題簽〕ない。内題は「波乃う爾里鼎噂」とある。

〔作者〕不明。

〔板元〕不明。

〔刊行〕序文の終に「時首夏吉日」とあるだけで、刊行時期不明。（年代推定は備考に譚る。）

〔丁数〕全丁数、十丁。最初の丁附は上とあり、次に㊀より㊉までの丁附がある。

〔挿絵〕ない。

〔備考〕この評判記の成稿及び刊行時期の推定であるが、本書に出てゐる竹本・豊竹両座関係の太夫中、初舞台が最も遅い竹本信濃太夫が始めて竹本座に出演したのは、外題年鑑に依ると、延享四年八月二十三日より上演の「傾城枕軍談」の時であり、この記録を信用するとすれば、本書の成稿は延享四年八月以後となる。次に本評判記の三味線中に出てゐる鶴沢平五郎は寛延元年（延享五年）正月五日より豊竹座初演の「容競出入湊」で、従来の竹本座から豊竹座に転じて出演してゐるが、この評判記では未だ「竹本」と記されてゐるため、これより以前に書かれてゐなければならない。即ち、延享四年八月以後、同年末頃迄の間となる。然し、この序文には「短夜さへ寝られず」とあり、「時首夏吉日」と記されてゐる。首夏は陰暦四月の異称であるから、少なくとも序文だけは四月に書かれたわけである。この四月を延享四年の四月とは到底考へられないし、又声曲類纂に依れば寛延元年四月には陸竹小和泉太夫（佐和太夫）が歿してゐてこれより一年も後の寛

延二年四月になつては本評判記中の陸竹佐和太夫の評判が無意味となるから、この序文が書かれたのは寛延元年の四月でなくてはならない。即ち本文は　延享四年八月以後、大体その年本迄に成稿し、序文を翌年四月に書添へたものと思はれ結局本書全体の稿が成つたのは寛延元年四月であらう。従つて、この刊行はそれ以後と考へるべきであつて、想像を許されるなら、佐和太夫の死の前後頃、死後としても余り時日を経過しない頃かと思はれる。細川景正氏が本書を山城少掾師に返却される手紙の中で、本書の刊行時を延享四年暮乃至同五年（寛延元年）春と推定してゐられるが、これには上記の理由から疑問を持つてゐる。

本書の太夫迯名中既に退座していた豊竹上野少掾（延享四年三月退座）を巻軸として評してゐるが、これは故人の竹本播磨少掾や隠退後の豊竹越前少掾を評してゐるのと同じく、受領の太夫であつたがために載せたものと思はれる。

〔内容〕　短かい序文についで豊竹越前少掾を特別に朱書して謎謎の形で次のやうに評してゐる。「声ハこけらくず・とハはて内匠にやつた、節ハゑつ王かうせん・なぜ雪の段切であつた」。これはいふ迄もなく、越前少掾が延享二年十一月「北条時頼記」五段目の切、雪の段を一世一代として出語し、上野少掾となつた内匠太夫に後を譲つたことを言つてゐる。

次に巻頭大上上吉竹本此太夫より謎謎形式の評で始まつて巻軸大上上吉豊竹上野少掾に至り、更に故人竹本播磨少掾を黒枠内で評して太夫の部を終る。

次は三味線之部・人形立役之部・人形おやまの部の順ですべて同じ謎謎形式の批評で終始してゐる。細評はない。上記の太夫・三味線・人形の人名を各座別に列挙すれば次の通りである。

竹本座

（太夫）
竹本此太夫
竹本志摩太夫
竹本政太夫
竹本錦太夫
竹本文字太夫
竹本百合太夫
竹本倡濱太夫
竹本友太夫
竹本播磨少掾

（三味線）
鶴沢友治郎
鶴沢平五郎
鶴沢万三郎
鶴沢伊八
（休足）
竹沢伊左衛門

（立役人形）
桐竹助三郎
吉田才治
桐竹門三郎

（おやま人形）
山本伊平治
（常座）
吉田文三郎
吉田八太郎

豊竹座

豊竹越前少掾
豊竹陸奥太夫
豊竹上総太夫

竹沢尊四郎
野沢文五郎
鶴沢藤助

若竹東九郎
豊松彌三郎
若竹伊三郎

藤井小八郎
藤井小三郎
三浦新三郎

豐竹駒太夫　野沢新蔵　豐松藤五郎
豐竹栄女太夫　野沢卯七
豐竹伊世太夫　野沢喜八郎
豐竹元太夫
豐竹春太夫
豐竹鐘太夫
豐竹上野少掾　竹沢彌七　松本次郎七　笠井藤四郎
陸竹佐和太夫　冨沢正五郎　浅田為十郎
陸竹伊豆太夫　竹沢乙五郎　中村勘四郎
陸竹桝太夫
陸竹桐太夫
陸竹宮太夫
陸竹嶋太夫
陸竹左間太夫
陸竹初太夫
陸竹美知太夫
陸竹常太夫
他國彌太夫
尾張力太夫

陸竹座

最後には「細評頓て本出し申候祝儀」とある。

〔批評の特徴〕　細評がないこと故、批評の特徴も明瞭ではないが、他の操芝居評判記の何々尽形式の批評に比して、この評判記の太夫連名に於ける謎謎形式の批評は必ず声と節との二つに分けて細かく行はれてゐる。例へば本書より約一年前に書かれた「浪花其末葉」の見立扇子づくしでは竹本此太夫を「御功者に見物も耳を揃へた金扇子」と評してゐるのに対し、本評判記では同人を「声ハ床のひやうぶ・とハひくふてもたてもの、節ハなすび香物・なぜもどつてからうまい」。かうした調子で「浪花其末葉」の此太夫に対する細評の要点をも、この短評中によく評し尽してゐる。豐竹上野少掾に対しても「声ハびううどのふとん・とハむつくりとするがちとよハい、節は鐃のいゑ・なぜ受領のうつハ物」といつた工合で著者の勝れた批評的手腕が窺はれる。本書での最高の位、極上上吉を与へられてゐる者は鶴沢友治郎と吉田文三郎との二人だけである。（播磨少掾と越前少掾とには位を附けてゐない。）

〔本書の価値〕　細評がないため、この評判記から知られるものは太夫・三味線・人形の芸風のみに限定され、それら芸人の一般活動状態や履歴等は窺はれない。然し竹本・豐竹両座に伍して、活動の期間こそ短かつたが「新操の陸竹に見物はわいてくる」（浪花其末葉）と当時評された陸竹座の陣容並びにその芸風等をかなり詳しく知り得る材料として「浪花其末葉」・「操曲浪華蔵」等と共に参考になるものである。

――大阪学藝大学助教授――